

ことばを学ぶ メカニズム

認知科学からのアプローチ

今井むつみ
Imai Mutsumi

第6回

モノはどのように数えるか ③ ——可算・不可算の見分け方

✿ 英語の可算・不可算文法が難しい理由

前回は、可算・不可算文法の有無がコップのような「全体」を持つ存在と、砂のような「全体」を持たない存在に関する認識——存在論的認識——にどのような影響を与えるかという問題について述べた。今回は、日本人が、物体と物質の存在論的違いが理解できるにもかかわらず、なぜ可算・不可算文法が難しいのかという問題を考えてみよう。

可算・不可算文法の定義は非常にシンプルだ。それなのに、日本人は、可算・不可算文法が苦手だ。日本人が英語を書くと、“The police found many evidences.”と書いたり（「証拠」という意味での evidence は不可算名詞なので、複数形では使わない），“I ate a chicken for lunch.”と言って英語母語話者に気持ち悪がられたりする。（鶏肉という意味の chicken は不可算名詞で、“a chicken”と可算名詞にすると、生きたにわとり一羽を食べたというイメージを聞き手に持たせる）

なぜ私たちはこの一見非常に単純に思われる文法規則に手こずるのだろうか。原因のひとつは、すべての名詞で、それが可算名詞なのか、不可算名詞なのか、ということの判断が簡単にできるわけではないことがあげられる。イヌや自動車やコップが可算名詞で、水やミルクが不可算名詞なのは納得できる。しかし、私たち日本語母語話者の感覚とずれていることもよくある。例えば、*Oxford English Dictionary*によると、（園芸種としてではなく、野菜の名前として言及するときの）キャベツ、レタスは可算・不可算両方、とあ

り、ブロッコリ、カリフラワーは不可算名詞、卵は可算名詞と書かれているが、私たちの感覚からするとこれらはすべて数えられる感じがする。英語は明らかに私たちとは別の理屈でモノの可算性を決めているのである。

抽象名詞の可算・不可算はさらにやっかいだ。抽象概念は目に見えないのでみな同じように不可算名詞、あるいは可算名詞になるかと思いきや、名詞によって可算、不可算が決まっている。「よいアイデアをたくさん思いついた」というので、idea が可算名詞であることには納得できる。同じように「たくさん証拠がある」というけれど、evidence は「証拠」という意味では不可算である。

しかし、私たち日本語母語話者が英語の可算、不可算文法を苦手とするのは、単にそれぞれの対象を数えるカテゴリーに入れるか入れないかという判断がずれていること以上に、もっと根が深い理由がある。

✿ 可算・不可算の感覚はどうやって身に付けるか

英語の名詞の可算、不可算は基本的にひとつひとつの名詞について個別に覚えるしかない。英語を母語とする子どもは、可算、不可算文法の意味を理解するようになる前にまず、名詞が現れる形の違いに気づく。あるときには単語は“a dog”“a cup”などのように“a”の後に現れる。同じ単語が“a”なしで現れる時には“dogs”“cups”のように単語の最後に“s”がつく。しかし、このパターンをとらない単語もある。このような単語は“a”と一緒に現れることもないし、語尾に“s”がつくこともない。

名詞が文の中で現れる形態へ注意を向けることは、単語の意味を考えるようになる前に始まっている。つまり、名詞を学習するときには、必ずその可算、不可算の形態を含めて塊として覚えるようになる。形態と共に覚えた名詞のストックがある程度記憶に貯まって初めて、文法の意味——つまり“a”で始まるか“s”で終わる形で現れることばは個体が単位となって「数える」ことができ、“a”と共に現れることなく、いつも単独で現れる単語はそれ自身が数える単位をもたない「数えられない」ことばであること——が分析され、発見されるのである。

それに対して、前回述べたように、日本語ではそもそも名詞を可算、不可算という基準では分類しない。名詞を分類するのは、助数詞であるが、助数詞は、「数えられる対象」と「数えられない対象」を文法的に明示することはない。英語では不可算名詞に対してのみ“a glass of water,” “a slice of meat,” “a pinch of salt”のように量詞をつける。つまり、水、肉、塩など、自身で数える単位をもたない（つまり数えられない）対象を、量詞によって数える単位を明示して数えるのである。

助数詞も理屈は英語の量詞と同じで、数える単位を明示する。しかし、英語の場合と違って、助数詞は動物や自動車のように明らかに「数えられる」モノに対しても、水やバターのようなものに対しても使われる。つまり、その名詞が数える単位を外から与えられなければ数えることができないという英語の基準で考えると、日本語のすべての名詞は、英語の不可算名詞と同等に扱われているということになる。しかも、日本語では助数詞は数と一緒にしか使われず、数を言う必要がないときは、「コンピュータは書斎にあります」というときも「マヨネーズは冷蔵庫の中にあります」というときも、名詞の現れる形式は同じである。

このため、私たち日本語話者は、名詞の文法形態に自動的に注意を向けることをしない。これが英語の名詞の可算・不可算を覚えることを難しくする。英語を読む、あるいは聞くときに、名詞の意味にばかり注意を向けてしまい、可算・不可算の形態には注意しないので、記憶もされない。したがって、私たちは、可算・不可算の形態

と切り離して英語の名詞の意味を覚えてしまう。その名詞を使うときに、可算・不可算文法に則ろうとしても、その名詞の可算・不可算をついつい自分の感覚で推測してしまう。日本語の感覚としてはレタスもキャベツもブロッコリもカリフラワーもジャガイモや卵と同様に一個、二個、三個と数えられるモノなので、当然可算名詞だと思う。「証拠」も、ひとつ、2つ、と数えられるから証拠に対応する“evidence”も当然数えられると思ってしまうのである。

つまり、日本語母語話者は可算・不可算文法を学習する時に、二重の意味で母語の影響をうける。母語において名詞を数えられる、数えられないという観点で自動的に名詞を分類する文法を持たないので、そもそも形態に自動的な注意を向けることをしない。注意を向けないので、名詞を聞いてもそれが可算・不可算のどちらだったかに注意を向けて記憶することができない。さらに、それぞれのモノに対する可算・不可算の認識が母語の影響で英語母語話者とズレてしまっている。このために、私たち日本語母語話者にとって英語の可算・不可算文法は習得が非常に難しくなっているのである。

私自身は英語で文章を書くときには、名詞を書くたびに意識的にそれが可算か不可算を考えるようにしている。ひととおりの文章を書いてしまった後でも文を見直し、可算・不可算が不確かな場合には辞書を引くようにしているが、辞書ではわからないことも多い。そういうときには英語ネイティブの友人に確認することにしてはいるが、最近では、インターネット上で無料で使えるコーパスも多用している。いずれにせよ、可算・不可算文法で間違いをしなくなるようにするには、英語は可算・不可算の区別を必ずつけること、名詞が可算か不可算かは自分の感覚に頼ってはいけなことをいつも頭においておき、意識的にチェックする習慣をつけることが大事だ。

（慶應義塾大学教授）

◆参考文献

Wierzbicka, Anna (1988). *The Semantics of Grammar*, Amsterdam; John Benjamins.